丸山久恵さん　100年インタビュー ②

～100歳のお誕生日を心から祝して～

イラスト／馬場敏美

●小学校卒業後、諏訪の製糸工場へ（13～15歳）

・長野県のえらいさまが家に来てね、工場で働きなさいと言われたもんで、そのあと見番さんが迎えに来て同級生4～5人と一緒に親元を離れたんですよ。悲しいとかさびしいとか全然なくってねぇ、旅行気分ですごくうれしかったよ。

・友達と6人部屋でおふとん並べて一緒に寝泊りして暮らしてたよ。工場全体で20人くらいかねぇ。7時にラッパの音で起こされて、洗面所で顔を洗って支度をして食堂でお膳にのった食事と結核にならないよう毎朝小皿に細かく刻んだニンニクが出て食べさせられてたけど苦くてねぇ。9時から作業が始まって、お湯に浮かんだ繭玉を小さいほうきでチョンチョンと（ほぐ）して、くずをのけてよい糸をのせるんですよ。見番さんが見回りに来て「これでよしよし」「だめだ」と声をかけてきてねぇ。こわい人はいませんでしたよ。昼は鐘の合図で休憩。3時の休みにはおやつにいつも小さなそばのお饅頭が2個出て、夕方5時に終わりだった。

・工賃は1年分まとめて親元へ送金されてね、自分の手元には飴玉を買うくらいの小遣いだけ。

・とにかく働くことが好きでねぇ、きれいにできてよくほめられたよ。やることは何でも楽しかった。とにかく体が丈夫で休むことなんてなかったよ。休みの日には友だちと小さい山に登ったりしたねぇ。

●名古屋の紡績（木綿）工場（15～17歳頃）

・糸巻の仕事をしてました。6人部屋でよその衆と一緒だったけど楽しかった。左腕が糸に引っかかっちゃって大けがしたけど休まなかったよ。

●静岡のお茶摘み　1ヶ月くらい7人程一緒に寝起きして手伝ってたねぇ。

●大阪（17～18歳頃）

・反物の糸が切れていないか傷んでいる所がないか見るんです。でも遊ぶ方が楽しかったなぁ。

●20歳、故郷に帰る

・兄が出征するので家の手伝いをするため実家に帰るよう言われてね、田舎に戻ったんですよ。果樹園の仕事は3～4日に一度は消毒せにゃあいけんから、ポンプを押すのが力がいって大変だったねぇ。間引きをした後新聞紙で作った手作りの紙袋を虫よけにかぶせたけど、新聞紙をわざわざお金出して買ってたねぇ。

（聞き書き／長谷川洋子・西崎麻子）